

「美咲！ これ一日早いけど誕プレ！ 明日は土曜日で学校休みだから渡しとくね！」

「えー！ ありがとう！ 嬉しい！」

「誕生日おめでとう！ これからもよろしくね」

「こちらこそよろしくだよ！ 本当にありがとう！」

放課後、クラスの友達が誕生日のプレゼントをくれた。私はそれを笑顔で受け取ると、手を振り去っていく友達に手を振りかえし、友達の厚意に心があたたかくなった。

——私の名前は佐倉美咲。

誰もが認める優等生であり、小学生の時からクラス委員長を務めてきた。そんな私は、親しい女子生徒以外からは『委員長』と呼ばれている。一見、

周囲から距離を感じるあだ名かもしれないが、日々の努力が認められている気がして、私は結構気に入っていたりする。

明日はそんな私の十六歳の誕生日である。

しかし、休日で学校が休みなこともあり、仲良しの友達からは有難いことに今日プレゼントを貰った。

プレゼントは大きい紙袋にまとめて入れて持ち帰ることにし、教室を出る。

「……早く帰らないと」

今日は両親に早く帰ってきなさいと言われていたので、私は早足で廊下を歩く。

すると、丁度曲がり角に差し掛かったところで、背の高い男子生徒に勢いよくぶつかってしまった。

「ぎゃっ！」

ぶつかった拍子にプレゼントの入った紙袋を落としてしまい、いくつかプレゼントが飛び出てしまう。

「あつ、ごめん！ 怪我はない？ ……って、委員長っ」

「いたた……あつ、」

ぶつかってしまった人物は同じクラスの早見祐くんだった。

実は私が密かに片思いをしている人物でもある。

早見くんは剣道部に所属していて一年生にしてエース。そして優しくて爽やかな好青年。クラス一のモテ男だ。

「ごめんね！ 大丈夫だった？」

「うん、大丈夫！ 私こそごめんなさい……早足だったから……」

「いや、俺でかいから痛かったでしょ？ 本当ごめん」

そう言つて早見くんは私が落とした荷物を素早く拾つてくれた。

すると、紙袋から飛び出してしまったプレゼントを見て、あれ？ と首を傾げる。

「もしかして、委員長、今日誕生日？」

「あ、ううん。明日誕生日なんだけど、休日で学校に来ないから友達が今日プレゼントくれたの」

「そうなんだ……」

全てを拾い上げた早見くんは「はい」と紙袋を渡してくれて、「ありがとう」と受け取る。

すると、早見くんは自分の鞆からゴソゴソと何かを探りだした。

「委員長、手を出して」

「？」

私は言われた通りに手を出すと、早見くんは私の手にコロンと何かを乗せた。

「一日早いけど誕生日おめでとう」

はは、と笑った佐倉くんが渡してくれたのは、可愛い個包装のいちご飴。  
「っ……！ えっ、あ、ありがとう！」

「……委員長はいつもクラスのために頑張ってくれてるけど、その他にも花壇の水やりとか、みんなのためにたくさん色々なことをしてくれていること知ってるよ。いつも教室に綺麗な花が飾ってあるのは、委員長のお陰なんだよね」

「えっ……そ、そんな……私が勝手にやってることだから……っ。ていうか早見くん知ってたの……？」

「勿論見てたよ。委員長のそういう優しいところ、凄く良いなって思っ

だから、これはそのお礼。でも、あまり頑張りすぎず、たまには俺のこと  
も頼ってくれたら嬉しいかな。クラスメイトだし」

「早見くん……」

「……ってこんなカッコつけたこと言ってるけど、急だったからこれしか  
なくてごめんね？ 来年はちゃんと祝わせて？」

「ううん……っ、十分すぎるほど嬉しいよ……！ 本当に嬉しい！ 泣き  
そうなほど嬉しい……」

そう言うと、早見くんは「大袈裟だよ」と笑ったけれど、私にとってみ  
れば全然大袈裟なんかじゃなかった。

だって、まさか、片思いをしている早見くんから祝ってもらえるどころ  
か、飴までくれて、その際軽く手が触れてしまったのだ。片思いをしてる  
相手と手が触れ合ってしまったら、浮かれてしまうのは仕方ないと思う。

そうこうしていると、遠くの方から「おい早見く！ 早くしろよー！ 部活遅れるー！」と男子生徒の声が聞こえてきた。

「おう！ 今行く！ ……じゃあ、委員長、ぶつかっちゃって本当にごめんね。明日は素敵な誕生日にしてね」

「うん……！ ありがとう！」

そう言つて早見くんは軽く手を振り、去っていく。私はその背中を暫く見送っていた。

「早見くん……ありがとう」

もう一度小さく、自分に言い聞かせるように呟いて、ゆつくりと歩き出す。心がじんわりあたたかくなった。

明日は十六歳の誕生日ということで、少し感傷的な気分になっていた。しかし、友達や好きな人に祝つて貰えて、ああ、私はちゃんと幸せだなと

思う。

そう、私は幸せなんだ。

これで十分なんだ。

——たとえば、誕生日に好きでもない人とセックスをしなくてはいけ  
ない宿命でも。



「美咲、分かってるわね」

「——はい」



その日の晩。私は正座をして母の話を聞いていた。

「十六歳になる誕生日……0時。あなたは今夜、サキユバスとしての力が芽生える」

「……」

「これはサキユバスの家系に生まれた女の使命」  
そう言うと、母は私を優しく抱きしめた。

「いつてらつしやい。美咲……素敵な夜になりますことを」

私の宿命——それは、サキユバスの家系に生まれてしまった淫魔として、常に命の危険と隣り合わせだということ。

サキュバスは、昼は人間として普通の生活を送っているのだが、夜は男性に夜這いを仕掛け、エナジーを搾り取らないと生きていけない性質だ。

……というのも、子供のサキュバスはまだ身体も未発達なことから普通の人間と変わらない食事ですむのだが、十六歳になるとサキュバスとして身体が急速に出来上がり、一人前と見なされる。

一人前のサキュバスは淫魔としての能力を維持するため、定期的にエナジーを摂取しなくては栄養が足りなくなってしまう、最悪餓死してしまうほどコスパが悪い。

ちなみにここで言うエナジーとは男性の体液……所謂、『精子』だ。

唾液などでも多少の栄養は摂取できるのだが、もちろん一番栄養価が高く、満腹感を得られるのは精液。そして経口接種よりも直接膈内に注ぎ込まれた方が、より一層満腹感を得られるらしい。

そして私は今夜、日付が変わったら十六歳になる。いよいよその時がやってきたのだ。

「素敵な夜に……か」

深夜0時を過ぎた頃、夜の街を空から見下ろしながら、母の先ほどの言葉が頭の中で反芻されていた。はたして素敵な夜なんてなるのだろうか……？

昼は隠している黒い羽を羽ばたかせ、ターゲットの家に向かいながらそんなことを考える。

——サキュバスのこの姿は自由自在で、昼は引っ込めている頭のツノと

尻尾も今は出しているので、開放的な気分である。この姿をしてる時はサキュバスの能力を発揮できるようになっているので、飛ぶことも可能なのだ。

しかし、デメリットもある。この格好は衣装の面積が狭いから谷間は強調されるわ、背中はガラ空きだわ、下半身は見えちゃいけないところが見えそうなギリギリのラインだわで、昼間は決して人前に出れるものではない。そもそも、羽やツノを見られてしまう時点でサキュバスだとバレてしまうから、人前に出ることはできないが。

あらかじめターゲットがいる家は目星をつけていて、特に十六歳になつたサキュバスには、若くて質の良い精子を持った男性をあてがうようにと、大人たちから決められている。

パタパタと夜の街を彷徨っていると、目的の家まで着いてしまった。

ベランダに降りると、私は昼間早見くんに貰ったいちご飴を取り出した。手のひらにころんと乗った、可愛いパッケージのいちご飴をじつと見つめる。

本当は……本当は、初めては好きな人としてみたかった。

でも、サキュバスとして生まれた以上、それが叶わないのは分かった。その現実から目を背けたくて、昼間は真面目な優等生を演じているのかもしれない。

きつと昼間の私は、自分で言うのもおかしいけれど、品行方正。お淑やかで、真面目で、とても男性経験などあるような女子生徒には見えないだろう。

しかし、それも今日でおしまい。私は一人前のサキュバスになる。

だからこそ、男性と交わる前に好きな人に誕生日を祝ってもらえて嬉しかった。

私はいちご飴をぎゅつと握りしめる。

「早見くん。ありがとう」

きつと、この恋心は叶うことはない。伝わることもない。それでいい。ただ私だけが知っている。そして大切にしていた。それだけでいい。

いちご飴の封を切って口に運び、舐める。とても甘い味が口の中いっばいに広がった。それは優しくて切ない味がした。

サキユバスの能力の一つに、手を翳せばどここの鍵でも開けられるという

便利なものがある。私はその能力を使い、ベランダの鍵を開けた。

勿論、この能力は男性のエナジーを摂取する目的以外に使ってはいけない。もしも強盗や犯罪などのためにこの能力を使ったものならば、永久に追放されることになる。

ドキドキしながら静かにドアを開けて、中に脚を踏み入れる。

部屋を見渡すと、どうやら家主はベッドで眠っていて、規則正しい寝息が聞こえた。

「おじやまします……」

不法侵入であることは変わりないが、なんとなく小声でそう言うと、ベッドの中でターゲットの男性が「ん、」と小さな声を漏らし寝返りを打つたのが分かった。

いけない。起こしてしまうところだった。

まあ起こしてしまっても、サキュバスの力で眠らせちゃえばいいのだけ  
ど、サキュバスになったばかりの私にそんな体力はないだろう。これ以上  
能力を使うなら、早くエナジーを吸収しなくては持たない。

あくまでも眠っている隙に夢を見させて、殿方と交わるのが一般的。抵  
抗されたら面倒だし、警察を呼ばれたらたまつたもんじゃない。もし顔を  
見られたら記憶を消すことも可能だけど、なるべく余計な能力は使わない。  
体力が減ってしまう。それが基本の教えだった。

私は物音を立てずにベッドに近づき、布団を捲ろうとした。——そ  
の時。

「……誰だ？」

布団から手が伸びてきて、大きな手で手首をガシツと掴まれてしまった。  
心臓がひゅっとして、小さく悲鳴が漏れる。



まさかターゲットが起きていたなんて。

失敗だ。早く逃げないと……！

しかし、手首を掴む力はとても強い。この人は武道でもやってるのだから。隙がない。全く手を振り解くことができず、もうここはサキユバスの力を使つて眠らせるしかないかもしれない。

……しかし、そんなことをしたら体力がなくなつてしまい、動けなくなつてしまうのではないか。そうなったら本末転倒だ。

どうしよう！ どうすればいいの……！ 助けてお母さん……！  
藁にもすぎる思いで祈る。

「泥棒か？ 悪いことは言わない。大人しく警察に——え？」

どうしようどうしようと青ざめていると、男の人から驚いた声が聞こえた。私を見て戸惑っている様子が見受けられる。

暗闇の中、パニックに陥っていた私はターゲットの顔を見ていなかったが、恐る恐る顔を上げて見てみると、その人は意外な人物だった。

「は、早見くん……!？」

「委員長……どうしてうちに……ていうかその格好……コスプレ？」

「え、きやつ！」

早見くんに露出の高い格好を見られたショックで腕で身体を隠す仕草をすると、早見くんは手をパツと離してくれた。それどころか私の肩にタオルケットをかけてくれる。その優しさに泣きそうになった。

「えーつと……ごめん。俺、今結構頭の中混乱してる……とりあえず、状況を説明してくれるかな……?」

「……」

「言えない理由？」

——私はサキュバスで、体内に精子を注入してもらわないと生きていけません。たまたま一番最初のターゲットが早見くんで、早見くんの精子を貰いに夜這いしにきました。

……なんて当然言えつこない。言っても信じてもらえるか分からないし、頭おかしいと思われかねない……

必死に頭の中で解決策を考えていると、急激に目眩が襲った。ふらりと倒れそうになる。

「委員長……!？」

——何、これ。目が回る。気持ち悪い。力が抜ける。

倒れそうになったところを、咄嗟に早見くんが抱き止めて支えてくれた。

「だ、大丈夫!？」

「い、いま……なんじ」

「え、もうすぐ0時40分になるところかな？」

なるほど。もうそんなに経ってるのか。これがサキュバスのエネルギー切れの症状だと分かるのに時間はかからなかった。

まさかこんなに早くエネルギー切れになるなんて……サキュバスになったばかりで、身体の変化に体力を一気に持っていかれたのだろう。体が慣れてないせいもある。

どんどん気分が悪くなっていき、ぐったりと全体重を早見くんに預けてしまう。

「今、救急車呼ぶから……待ってて」

「まっ、て……よばないで……」

「でも顔が真っ青だ、すぐ医者に——……」

「き、す……」

「え？」

「キスして……おねがい……そうすれば、良くなるから……」

いきなりクラス委員長が部屋に侵入してきて、しかも露出狂と間違われ  
てもおかしくないような格好で現れて、倒れたかと思ったらキスを強請る。  
早見くんからしたらこんな意味不明な状況で突然何を言っているんだと、  
自分でも分かってる。それでも身体が言うことを聞かなくて、私は弱々し  
く、今手っ取り早くエナジーを吸い取れるキスを強請るしかなかった。

「分かった」

——分かった？

自分で強請つというてあれだが、まさか本当に承諾してもらえとは思っ

ていなかった。信じられない顔で、虚な目で早見くんを見上げる。

ゆつくりと早見くんの顔が近付いてきて、あ、キスされる……と思った瞬間、唇にふにと柔らかい感触………と思ったら。

ちゅう♡、ちゅうううう♡♡♡、ちゅうっ♡♡♡、くちゅ♡♡♡、ぐちゅ♡♡、くちゅ♡♡♡♡♡♡♡

「んっ……!? んんっ♡、ん……っ」

唇と唇の隙間をこじ開けて、咥内に躊躇なく舌が滑り込んできた。

「んんっ……♡、ん、あっ♡、ん、んん……♡」

ぬめつと割り込んできた舌が舌を絡ませてきたので、驚いて咄嗟に逃げようとするが、狭い咥内の中では当然逃げ切れるはずがなく、くちゅくちゅ♡と絡み合う。

「ん、ああっ……♡、ふあ♡、……んんんっ♡♡♡♡♡♡♡」

私の小さい口の中を、早見くんの熱くて長い舌が掻き回してくる。

口の中、きもちいい……ッ♡♡♡

頬の内側を舌でぐりぐりされて、柔らかい粘膜を這う舌。それから歯列をなぞられ、歯茎の底までも隅々まで舐め回される。口の中をべろんべろんに犯されて、腰が砕けそうになる。頭がとろんとして、脳内がピンク色に染まり、ふわふわして何も考えられない。

そんな身体とは裏腹に、内側からは燃えるようにみるみるエネルギーが湧き上がる。

——何これ……キスだけですごくみなぎる♡♡♡

これが早見くんのエナジー……

美味しい♡♡♡

もつと食べたあい♡♡♡♡

「んっ♡、んんっ♡♡♡♡、んっ、♡♡」

「んっ……いちごの味がする」

口の中を犯されながら、早見くんが言う。きっと先ほど舐めたいいちご飴の味だろう。

「あっ……♡、ん、あっ♡♡、んんっ♡」

あまりにも甘美で、私自身も気付いたら無我夢中で早見くんの舌を激しく求めていた。熱い吐息の合間に貪るように啞内を堪能する。

激しいキスに、どちらのものか分からない唾液が口の端から伝う。それでも止まらず、舌をずちゅうう♡♡♡と吸われる。

くちゅくちゅやらしい音が脳の隅々まで響き渡り、下半身がずんと疼く。

「ふはっ……はあ……♡」

「……これで良かった？ 委員長」



ディープキスを堪能した後やつと解放され、大きく呼吸する。

まさかこんな激しいキスを早見くんにされるとは思っていなかったから、驚きを隠せない。

それに、キスだけでは十分なエナジーを摂取することはできず応急処置程度だと教わっていたのに、身体がすっかり回復していた。寧ろ超元氣。ピンピンしている。これは一体……

「早見くん……あ、ありがとう」

「体調が落ち着いたらでいいから、説明してくれるかな……？」

「……………うん」

もうここまで来たら言い逃れはできない。どうにでもなってしまったと半ばヤケクソな気持ちで、私は自分がサキュバスであることを話した。



「――なるほど。未だ混乱はしてるけど、経緯はなんとなく分かったよ……」

「信じてくれるの……？」

「まあ、委員長のその背中に生えた羽や、どうしてうちに侵入できたかの説明はつくからね。何より、委員長のことは信頼してるから信じるよ」

私を安心させるためか、困ったようにだが優しく笑ってくれた早見くんに、私は心の底から安堵した。さすが私の好きな人だ。

「ありがとう……」

「つまり、委員長はセックスをしなくては生きていけなくて、初めての相手に俺が選ばれたってことだね」

「う、うん……でも、まさかクラスメイトだなんて知らなかったの……色々とごめんなさい」

「委員長のせいじゃないでしょ。……それより、この後どうしようか」

「うん……あの、さっきのキスでたくさんエナジー貰えたからひとまず元気になったし、他の人を探そうと思うの……本当に迷惑かけてごめんなさい。ありがとう」

早見くんが相手で嬉しかったけど、それを早見くんに強要するのは違うと思った。

先程の情熱的なキスだけで十分だ。

もう全てバレてしまった以上、他の人を探すしかないだろう。

私は早見くんにお辞儀をして、早見くんの家を出ていこうとした。

「……それ。他の人とセックスするってこと？」

しかし、早見くんは私の手首を掴むと出ていけないようにし、眉を顰めながら怪訝そうに訊ねる。

「え、うん……そういうことになる……のかな？ 私、エナジーないと生きられないから……恥ずかしいけど……」

「でもそれって、俺がダメなら次……ってことだよな？ 委員長は他の、知りもしない男とそういうことをするってことだよな？ 俺、委員長にはそんなこととしてほしくない。勝手かもしれないけど」

「うっ……そうだよな」

厳しい視線に、きつと誰でもいいビッチだと思われたのだろう。軽蔑をされたのかもしれない。

……でも、そう思われても仕方ないのは分かってる。だって、サキュバスとはそういう生き物だから。

——本当は、私だって好きな人がいい。

ずっと好きだった早見くんにエナジーを貰いたい。けど、流石に早見くんにそんなことは頼めない。

お腹が空いて精子が欲しいから私とセックスしてくださいなんて、言えるはずがない……

それでも、誰かに精子を貰わないと私は生きていけない。だから、ビッチだと思われようと、生きていくためにこうするしかないのだ。

情けなくて、悔しい。

サキュバスに生まれた自分が憎い。

でも、ここまで大切に育ててくれた両親に申し訳なくて、こんなことを

思ってしまう自分はもつと憎い。

——お母さん、やつぱり素敵な夜になんてならないみたい。

様々な複雑な感情から泣きそうになると、早見くんが意を決したように口を開いた。

「……分かった。俺が、相手になるよ」

「——えっ、ええ!？」

「俺が選ばれたってことは、俺でもいいってことだね？　俺、委員長に知りもしない男とセックスなんかして欲しくない。だったらせめて……最初に選ばれて、キスもした俺の方が良くない？　元々クラスメイトで知り合いだし」

「で、でも……迷惑じゃ……」

「迷惑じゃないよ。委員長が他の男の元に行つて、セックスをすると  
思う方が心苦しい」

なんて優しい人だろうか。こんな奇跡みたいな幸せがあつて良いのだら  
うか。

早見くんはひよいと私の体を姫抱きすると、先ほどまで早見くんが寝て  
いたベッドに優しく下ろして寝かせてくれた。

これが早見くんのベッド……早見くんの匂い……

「上手くできるか分からないけど……」

早見くんは上に来ていたTシャツを脱いだ。剣道部で鍛え抜かれた逞し  
い筋肉が眩しい。美しい体に直視できず、あまりの急展開に頭もついてい  
かない。心臓がバクバクいつている。

確かに初めては早見くんが良いとは言ったけど、心の準備ができていない。

「ていうか改めてすごい露出高いね……その服……？　下着、じゃないよね……？」

「これは……サキュバスの衣装で……」

「そうなんだ……触るね……？」

こくんと頷くと、早見くんはブラを捲り上げる。ぷるんと胸が揺れて、こぼれ落ちるように乳房が溢れた。

「大きいね……」

「う……恥ずかしい……」

「ふふ、可愛い。委員長、ばんざいして」

言われた通りに手を上げると、ブラが取り除かれてしまう。乳房に感じ



る視線。ずっと好きだった人に胸を見つめられて、ツンと乳首が硬くなっているのが分かった。

早見くんの右手が胸に添えられて、やんわりと揉まれる。

「……んっ、」

やわやわ揉む手は慈しむようで、早見くんの大きい手が溢れんばかりの乳房を甘く愛でている。くすぐったくて恥ずかしい。

「ん……あっ♡」

すると、不意に人差し指でコリっ♡と乳首を擦られ、甘い痺れが襲う。

「ひゃっ……♡、あっ♡」

「乳首、気持ちいい？」

「あっ、……んっ♡、き、もちいい♡」

——コリコリ♡♡♡

こねくり回すように、コリコリと乳首の先端を刺激される。硬くなった突起は、まるで待ち侘びていたように主張し、カチカチに震えている。

「んっ♡、あっ……♡、んんっ♡」

両方の乳首をコリコリ♡こねくり回されて、思わず腰に力が入る。コリコリされたかと思えば、人差し指と親指できゅう♡と摘まれて、コリコリされている時とは違った稲妻のような電流が乳首を襲う。

「んっ、ああっ♡、ん、ひんっ♡、んんっ♡」

乳首を弄られているだけなのに、下腹部がきゅん♡とする。じんわりとショーツが濡れてきているのが分かる。

「ひっ、あっ……♡、んっ♡」

乳首を摘まれるのが気持ち良くて、えっちな声が止まらない。ジンジンと熱を持つ乳首。きゅう♡きゅう♡と摘まれ、擦られて、乳首だけでうん

と感じてしまう。

——カリッ♡♡♡

「ひ、あっ♡」

突如乳首を爪の先で甘く引っ搔かれて、弾け飛ぶような快樂に、足のつま先がピンと反る。

「——ひあっ、それっ、だめっ♡」

「乳首引っ搔かれるのが随分好きみたいだね」

「あっ♡、ちがつ、♡、だってえっ♡」

「驚いたなあ。優等生で、お淑やかで、清楚で、真面目な委員長が、乳首でこんないやらしくなっちゃうエッチな小悪魔ちゃんだったなんてね」

くすくす笑う早見くんこそ、いつもの優しくて爽やかな好青年には見えない。低くてエッチ声で言うから、そのギャップにゾクゾクとしてしまう。

乳頭に甘く爪を食い込ませ、くりくり♡ほじるように乳首を押し込んで、ピンと弾かれる。

「あんっ♡、やつ……♡、だめっ♡、乳首……♡、きもちっ……♡」

ジンジンと熱を帯びる乳首に今度は早見くんの顔が近付いて、まさか……と思う。そのまさかだ。乳首にちゅ♡と口付けをすると、次に熱い粘膜に包まれた。敏感な乳首が早見くんの口の中に在ると思うと、それだけでぶるりと鳥肌が立つ。滑りを帯びた舌が、這うように乳首を舐める。

「ふっ、んっ……♡」

ねとお……♡と下から上へ舌を這わされて、生あたたかい感覚に身震いした。時折舌先でツン♡と突かれて、咥内で乳首を転がされる。

私はシーツをぎゅうつと握りしめて、快楽に耐えるしかできない。本来ならサキュバスの私が優位に責めないといけないのに、されるがままでし

かいられないなんて。

しかし、乳首による刺激に身体は正直で、もつともつと訴えていた。口の中で乳首をべろべろ舐め回されて、舌のざらざらが乳首に押し潰される。何も刺激されていない下腹部が切なくなつて、焦つたくてどうしようもない。

そうこうして暫く乳首を堪能したあと、やつと解放されたのかと思つたら、今度はもう片方の乳首も虐められる。

「やあっ♡、もつ、ちくび、いやあっ♡」

「でも、片方だけなんて不公平でしょ？」

よくわからない理論を言われるが、ろくに頭が回らないので納得してしまふ。同じように乳首を愛撫されて、ちゅうう♡とまるで赤子のように吸い付かれてしまふ。気持ち良すぎて頭が真っ白になり、あそこがひくん、

と小さく痙攣した。

「あっ♡、ひっ♡、あアア……っ♡♡♡」

まるで私の方がエナジーを吸い取られているように乳首をちゅっちゅっ吸われてしまい、下半身を跳ねさせて軽く甘イきしてしまう。

「委員長、えっろ……」

「はあっ……、んっ、♡、はあ……え……？　わたし、いった……？」

「うん。イってたね。まんこ突き出してビクビクってしてたよ」

まさか胸の刺激だけでイってしまうなんて思わず、私はくったりしてベツドに沈み放心状態だ。

——うそ。うそ。私、今のでイっちゃったの……？

信じられない気持ちでいると、突如衣装の際どいところまで出てしまっているショーツの上から、膣の割れ目をすつと撫でられる。

「んっ♡」

敏感な部分を触れられて、思わず甘い声を出してしまう。

「やっ、そこっ……♡」

脚をぱかりと開かされて、指で割れ目をなぞられる。私は閉じることはせず、自らも脚を広げるしかなかった。

待ち侘びていた下半身への愛撫だが、あまりにも緩やかで刺激には足りなさすぎる。

私はもどかしくて、無意識に早見くんの指に膣を押し付けるように、腰を揺らしてしまっていた。

「委員長、腰が揺れてるよ」

「んっ♡、やっ♡、恥ずかしいっ♡♡♡」

そう言いつつも腰の動きは止まらず、みつともなくへこへこと腰を突き

上げてしまう。サキュバスとしての欲には逆らえないのか、そこに強い刺激が欲しくてたまらない。

「すごい。布の上からでも濡れてるのが分かるよ」

どうやら愛液が滲み出てしまったようで、ショーツには大きなシミができている。早見くんはシミ部分をこねくり回すと、ぬちゃあ♡と糸を引き、やがて水たまりになる。

「ふっ……♡、あっ、う、んっ♡」

布越しに擦られている感覚がもどかしくてたまらない。じつくりと愛液を染み込ませたのだろう。次に指先で弾くように膣を叩くと、そこからぴちやぴちや♡といやらしい水音が聞こえた。

「いやあっ♡、恥ずかしい……♡」

「改めて見てもこれすごい衣装だなあ。普通こんな面積の少ないショーツ